

2026年(令和8年) 3月2日

# 印旛普及だより

第 46 号

〒285-0026 佐倉市鎬木仲田町8-1 TEL:043-483-1128 FAX:043-485-9502  
ホームページアドレス <https://www.pref.chiba.lg.jp/ap-inba/inba/mokuji/index.html>  
発行:千葉県印旛農業事務所改良普及課・印旛地域農林業振興普及協議会



印旛の農産物をマルシェで販売&活動PR!



小学校での食育活動



疲労解消のためのヨガ講座



楽しく会報紙づくり

印旛地域の農業を担う新たな女性農業者ネットワーク  
「Menou\*いんばすけっと」の誕生!  
新規メンバー募集中!

令和7年1月に印旛地域で活躍していた2つの女性農業者組織が再編され、新たに「Menou\*いんばすけっと」が設立、18名のメンバーで活動しています。

農業経営の向上や地域の農業振興に向けて、メンバー同士が互いに学び合い、成長できるネットワーク活動に取り組んでいます。

具体的には、地域の保育園や小学校での食育活動、農産物や活動のPRに向けた情報発信、マルシェの実施、他地域の女性農業者組織との交流、生活や営農に関する悩みの共有やスキルを磨く意見交流会など、多岐に渡ります。

「Menou\*いんばすけっと」では、一緒に活動いただける新規メンバーを募集しています。夢や希望を分かち合い、共に学びながら一緒に活動してみませんか? 関心がある方は当農業事務所までご連絡ください。

## 高温に強い米づくりに向けた技術対策

近年、夏季の高温により、水稻の品質低下が顕著となっており、県内では、登熟期の高温に伴い白未熟粒の発生が増加し、整粒割合の低下につながった事例が複数報告されています。印旛管内においても、同様の傾向がみられ、高温対策の必要性が高まっています。

高温対策としては、①水管理の徹底、②施肥の工夫、③高温耐性品種の導入の3つが重要です。

### ①水管理の徹底

生育初期は、高温下で分けつが増えて籾数過剰につながります。籾数過剰の場合、茎葉から籾へのデンプン供給が追い付かず、籾の養分蓄積が不十分となり、白未熟粒（乳白粒）の発生が助長されます。茎数過剰を防ぐため、表1の目標茎数に到達したら、速やかに中干しし、田面に細かいひびが入

る1週間程度を目安に行いましょう。

また、出穂3週間前から出穂2週間後は、地温上昇を抑えるため、湛水管理をしっかりと行うことが重要です。登熟期は、間断かんがいで健全な根を確保しましょう。落水は出穂期後25日以降とし、品質低下を防ぐため、早すぎる落水は避けましょう。

表1 各品種の中干し開始適期

品種	移植期	砂質	壤質	粘質
ふさおとめ	4月20日	27本/株	27本/株	24本/株
ふさこがね	4月20日	20本/株	20本/株	20本/株
コシヒカリ	4月20日・5月1日	18本/株	17本/株	16本/株
粒すけ	4月20日	26本/株	24本/株	

※60株/坪植えの時の1株当たり茎数の目安  
極端な疎植の場合はこの目標茎数に達しないことがある

表2 各品種の出穂期の葉色目標及び軽減対策における対策時期と施用窒素量

品種	葉色 (SPAD値)	葉色 (カラーチャート)	対策時期	窒素量
ふさこがね	36.5	4.5	出穂期 7～5日前	1 kg/ 10 a以内
コシヒカリ	34.4	4.2		
粒すけ	34	4.2		

カラーチャート4を下回る場合は要注意！

出穂時期は「でるた™」を参考に！



### ②施肥の工夫

出穂後20日間の平均気温が26℃を超えると基白粒や背白粒などの白未熟粒が多くなります。出穂期7～5日前に葉色が表2の目標値に達しないと予想される場合、10 aあたり窒素1 kgを上限とした追肥が有効です。全量基肥栽培では葉色の変化をこまめに観察し、必要に応じて追肥しましょう。



整粒 乳白粒 基白粒 背白粒

写真 白未熟粒の種類 (令和7年産 コシヒカリ)

### ③高温耐性品種の導入

また、ケイ酸は葉を直立させ、過剰蒸散を抑制し、カリは根張りを促進するため高温対策に有効です。土壌診断を行い、基準値を下回る場合は「けい酸加里」を基肥として10 aあたり40～60 kg施用し改善を図ります。

高温に強い品種として「ふさおとめ」等の導入が有効です。品種選定とあわせて栽培管理を最適化することで、高温下でも安定した収量・品質が期待できます。

## 秋冬ニンジンにおける 高温・乾燥対策

近年、秋冬ニンジンののは種時期である7月下旬～8月の高温・乾燥の影響により、発芽率や品質の低下が見られています。特に、早生品種においてエクボ症や肩こけ、空洞症等の高温障害が多発しています。今後も夏期の高温が予想されていることから、必要な対策を心掛け、収量や品質の向上に努めましょう。

### 【対策のポイント】

- ①は種時
  - ・は種前は土壌を軽く鎮圧し、20～30mm程度のかん水を行う。
  - ・極端な早播きを避ける(8月以降を推奨)。
  - ・適切な株間の設定を行う(6cm前後が目安)。
- ②は種後の管理
  - ・本葉2枚ごろまでは高温・乾燥に非常に弱い状態です。また、本葉6枚ごろまでに高温や乾燥によるストレスがかかると、空洞症や肩障害の発生につながります。
  - ・培土には、肥大促進や肩障害の軽減などの効果があります。
  - ・発芽後も本葉6枚ごろまで、土壌が乾いたらかん水を行う。
  - ・かん水は気温の低い朝夕に行い、焼けを防ぐ。
  - ・2～3葉期に培土をし、胚軸を高温から守る。
  - ・4～6葉期にしっかりと培土を行う。

## 施設花きにおける夏季 の高温対策

近年の夏季の高温により、施設切花において、短茎化や茎の軟弱化、奇形花の発生等の品質低下が問題となっています。そこで、今年度はユリ栽培で高温対策の実証を行いました。ここでは、他品目にも応用できる2つの技術を紹介します。

### 【外気導入によるハウス内の気温抑制】

外気導入機を設置して強制的にハウス内に外気を送り込むことで、ハウス内の気温が低下(8月下旬で日平均約2℃)し、草丈が長くなり、輪数が多くなりました。また、植物群落内への二酸化炭素の供給による効果も示唆されました。

### 【遮熱シートによる地温抑制】

球根植付前の畝上に遮熱シートを3～7日間ほど、べたがけ被覆することで、生育初期の地温上昇



高温の影響による  
エクボ症



令和5年に多発した  
空洞症



写真 遮熱シートの設置  
(球根植付前の畝上にシートを  
べたがけする)



写真 外気導入の設置  
(上部にダクトを設置し、外気  
をハウス内に送り込む)

を抑制し、草丈が長くなり、輪数が多くなりました。また、地温が下がることで、作業者の作業負担も軽減され、球根植付前の土壌の乾燥を防止する効果も確認されました。

今後も高温対策に関して検証をし、情報発信する予定です。

## ニホンナシの高温対策

近年、ニホンナシでは、「あきづき」のコレク状果肉障害や、みつ症の発生が問題となっています。コレク状果肉障害は、発生要因がいくつかありますが、生育期間の高温が要因の一つであると判明しています。また、みつ症は、満開後91〜100日での最高気温の平均値が低いと発生が多くなるとされていますが、収穫前の8月〜9月の高温でも発生が助長されます。いずれの障害も、高温と乾燥が原因と考えられるため、高温や乾燥を防ぐ対策が必要となります。

### 【高温乾燥を防ぐかん水技術】

かん水のタイミングは、5月以降、10日〜15日のまとまった雨が無く、地面にひび割れが確認できるときです。pFメーターを使用している場合は、「幸水」「豊水」でpF 2.3、それ以外の品種でpF 2.7に達したら、かん水します。かん水

量の目安は、1回あたり20mmです。かん水設備がある場合は、毎日2mmをこまめにかん水しましょう。かん水設備が無い場合は、スビードスプレーやタンクを活用して、1樹あたり500Lをかん水しましょう。かん水の終了時期は8月中旬頃が目安となります。

### 【かん水以外の高温対策】

新梢管理を控えるために、果実に日光が当たらないようにし、高温にならないようにします。

その他の対策として、果実温度が上がらないような位置に着果させることを心がける等があります。

今回記載した対策をとるとともに、土壌改良等の基本的な管理を徹底しましょう。



ニホンナシのコレク状果肉障害

## 自給飼料として水田裏作の麦類を作ってみませんか？

近年、輸入飼料価格の高止まりが続く、畜産経営は依然として厳しい状況にあります。こうした中、稲WCSや飼料用トウモロコシに加え、麦類が自給飼料の選択肢として注目されています。麦類は、品種にもよりますが、一般的に耐寒性が強く、秋遅くまでは種が可

能です。は種期の幅が広いいため、稲WCS収穫後から麦類のは種までに余裕を持てます。

### ①大麦

稲WCS用の収穫・調製機械をそのまま活用できるため、導入の手間やコストが抑えられ、再び関心が高まっています。麦類の中でも嗜好性が良く、サイレージ適性も高いとされていますが、エンバクよりも湿害や酸性土壌に弱いいため、土壌条件によって排水対策をとるなどの土壌改良を行います。発酵品質の影響で乾物摂取量

や飼料充足率がやや低下する可能性はありますが、乳量や乳成分への影響は少ないとされています。

### ②エンバク

麦類の中では土壌の適応性が比較的広く、牧草と比較し、湿害には強くありませんが、他の麦類よりは作りやすいので、水田裏作でよく栽培されています。

水田裏作の麦類のは種期は秋播きで10月中旬から11月上旬、収穫期は出穂期で4月上旬、糊熟期で5月上旬です。水田の裏作として稲WCSや主食用米の後に大麦を栽培することで、作期の分散や土地利用の効率化が図れるほか、年間を通じた自給飼料の安定供給にもつながります。他にもいろいろな種類の麦類がありますので、詳しくは当農業事務所までお問い合わせください。

**新しい指導農業者と農  
業士が認証されました**

印旛地域の令和7年度農業者等として指導農業者6名、農業士3名が認証されました。

**【指導農業者(6名)】**



**富岡 正史 氏**  
(成田市)  
**露地野菜**

サツマイモを主軸として、メロン及び秋冬ニンジンを組み合わせた経営をしています。  
堆肥及びソルゴー等の緑肥を活用した土づくりにより連作障害を防ぐことで、収量・品質の安定化を図っています。



**齊藤 裕治 氏**  
(成田市)  
**養豚**

繁殖肥育一貫経営の養豚経営を行っています。  
繁殖能力の高い母豚の導入による

繁殖成績の向上、ワクチネーション等による疾病対策や消毒等による衛生対策を徹底し、肉豚出荷頭数の向上に努めています。



**小山 美千代 氏**  
(印西市)  
**野菜苗+野菜+**  
**六次化**

野菜苗・ハーブ苗各種を生産し、家庭菜園や直売型生産者向けに直売しています。  
野菜の持つ魅力を存分に楽しめるベジブーケ®を通して、農業の魅力と可能性を発信しています。



**宇賀 義則 氏**  
(白井市)  
**果樹**

家族5人を中心とした果樹専作経営であり、ナシとブドウを組み合わせて直売の時期を伸ばしています。  
品質の良い有望品種を積極的に導入し、高品質な果実生産を心掛

けています。



**押田 知之 氏**  
(白井市)  
**果樹**

白井中央梨選果場組合に在籍しており、ナシを全量市場出荷で販売しています。  
臨時雇用を安定的に確保し、摘果作業等の適期管理を行うことで、安定的な経営を実践しています。



**中嶋 智彦 氏**  
(白井市)  
**果樹**

家族5人を中心としたナシ経営で、特に「幸水」を多く栽培しています。  
毎年、収穫始めに作業者全員で食味を確認し、その年に適した色で果実を収穫し、販売する果実が必ず高品質になるように心掛けています。

**【農業士(3名)】**



**岸野 邦夫 氏**  
(四街道市)  
**果樹**

梨専作であり、顧客を大事にした全量直売の経営を行っています。

食味にこだわり、米ぬかを基軸とした有機質肥料中心の肥培管理とし、多様な顧客の要望に応えるべく、「秋のほほえみ」等の地域に導入されていない品種の栽培にも積極的に取り組んでいます。



**市川 健太郎 氏**  
(成田市)  
**植木**

「エコロジーな街並みづくりに貢献する」という経営理念のもと、需給動向や原価計算をもとに生産品目を精査して、高品質なポット植木を生産し、収益向上につなげています。

従業員の育成にも熱心に取り組んでおり、お互いが気持ちよく仕

事できるように経営理念、行動指針を明文化し、共有しています。従業員の自己実現のため、各自で年間の目標を立て、4カ月に1回面談するなど、手厚いサポートも行っています。



**米田 将之 氏**  
**(八街市)**  
**露地野菜**

露地栽培を中心としたニンジン、落花生、スイカ等多品目の経営を行っています。

雇用にあたっては、「農業をやりたい人が活躍できる環境づくり」を目指しており、農業を志す農業未経験の若者も積極的に受け入れています。

また、SNSにより農業の魅力を情報発信し、令和6年から農家の母家を改修して住宅宿泊事業（農泊）の運営も始めており、農業体験を通して農業や農家生活の魅力を伝えていきます。

### 伊旆郡市指導農業士会の紹介

本会は、千葉県知事に認証され、担い手育成と地域農業振興を推進する伊旆郡市在住の指導農業士で構成されています。

農業を志す方の農業実習の受入れや農業事務所が開催する農業経営体育成セミナー等の講師を担うなど、地域農業の多様な担い手の育成を進めています。

また、伊旆郡市以外の地域の指導農業士会との研修会を実施するなど広域のネットワーク作りも行っています。

### 若手農業者の皆さんへ 伊旆農業経営体育成セミナーに参加しませんか！

農業事務所では、就農して間もない若手農業者を対象として、農業経営体育成セミナーを開催しています。

当セミナーは農業経営に必要な知識、技術、課題解決方法、経営計画の策定方法などを習得するとともに、セミナーを通じての仲間作りも目的としています。3年間の研修カリキュラムで研修終了時には認定農業者の経営改善計画を自力で策定できるような力を身につけることが目標です。

令和7年度は基本研修（1年目）9名、専門研修（2年目）12名、総合研修（3年目）14名の計35名が参加しています。

1年目は、生産技術に関する基礎知識の習得と、地域農業を知ることの主な目的として研修を行います。2年目は、研修生が自ら設定した課題を解決するプロジェクト

学習を中心とした実践的な研修を行います。3年目は、経営者の視点で営農計画を作成し、経営の将来をデザインする力を養うための研修を行います。いずれも、研修生同士が互いの経営を学び合う相互訪問や先輩農業者への経営視察も取り入れ、意見交換を積極的に行える内容にしています。

興味関心のある方は、当農業事務所までお問い合わせください。



セミナー生との意見交換



先輩農業者への経営視察